

幼児期における関係性構築動機

神戸大学大学院人間発達環境学研究科* 古見文一

Whom Do You Want to be a friend? Preschooler's motivation to building a relationship with others

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University,

FURUMI, Fumikazu

要約

これまでの研究から、幼児期は心の理論の獲得時期であり、社会性の発達に重要な転換点であることがわかっている。また、日常生活においても、年代の近い多くの子どもたちと関わり合った遊びなども多くみられるようになる。しかしながら、子どもたちがどのように友人関係を構築していくかという事は明らかではない。成人については、人は自分と近い相手に対して関係性を構築する動機をもったり、関係性を構築したい相手を模倣したりするという仮説が立てられている（社会的動機仮説）。本研究では、三つの実験から幼児がどのような他者に対して関係性を構築したいという動機をもつかについて検討した。

【キー・ワード】 幼児, 関係性, 動機, 内集団, 外集団

Abstract

Many previous studies revealed that typically developing children get theory of mind in their preschool age. Preschoolers build a relationship between their friends and make their own group in their daily life. However, few studies have focused on children's tendency to build a relationship with others. This article aimed to review the studies about adults' social motivation hypothesis and the studies about children's group bias. According to social motivation hypothesis, people want to build a relationship with others with similar backgrounds. This study investigated children's preference for which person they want to build a relationship.

【Key words】 Preschooler, relationship, motivation, ingroup, outgroup

* 現所属：静岡大学大学院教育学領域

問題と目的

発達心理学の分野において、幼児期の社会性の発達については心の理論 (Theory of Mind) の研究をはじめ数多く行われてきた (メタ分析として Wellman, Cross, & Watson, 2001)。幼児期は心の理論の獲得時期であるとともに、社会性の発達に非常に重要な時期であるといえる。高辻 (2002) は、幼児が保育園や幼稚園において同年代の集団の中で友達関係を形成し、それを維持していくことを幼児期の重要な発達課題であると指摘している。大人は、子どもに対して動的に、タイミングよく応答して喜ばせたり楽しませたりし、物は子どもの働きかけに対して静的に反応する。一方で、子ども同士の場合は、お互いが相手の行動を予測することが困難であり、どのように同年代の子どもと接して対人関係を構築し、仲間関係になれていくかは非常に重要である (廣瀬・志澤・日野林・南, 2006)。謝 (1999) は、新入幼稚園児を対象として観察研究を行い、安定した友達関係や仲よし関係、親友関係は入園後 1 ヶ月半から 3 ヶ月頃に形成され、入園前にどのような関係性であったかが幼児の社会的ネットワークに影響することを報告している。さらに、近藤 (2017) は、幼児のやりとりの頻度や相手に着目して観察を行い、年少児は年中児よりも先生とのやりとりの頻度が多いということを報告している。

一方で、これらの幼児期を対象とした関係性に着目した研究では、観察研究がほとんどであり、統制された場面において、幼児がどのように関係性を構築する相手を決定しているかは明らかになっていない。本研究では、成人を対象として想定されている社会的動機仮説を参考に、子どもが複数の他者に対して異なる社会的な動機を構築するかどうかを検証する。社会的動機仮説とは Chevallier, Kohls, Troiani Brodtkin, & Schultz (2012) が提唱しており、人は関係性を構築・維持したい相手に対し、模倣 (外面的同質化) や相手に合わせた嘘 (内面的同質化) によって心的距離を接近させる動機をもつと考えるものである。Furumi & Koyasu (2013, 2014) では、成人や児童において同質な他者よりも異質な他者の心を理解することの方が困難であることが指摘されている。また古見・Hamilton (2017) では、10代から20代の参加者の行動データと事後の自己報告の結果から、人は自分と外面的、あるいは内面的に近い相手をより理解したいという動機をもつことがわかっている。

しかしながら、これらの傾向がどれくらいの発達段階からみられるのかはわかっていない。子どもの関係性の認識については、Moore (2009) が、4歳~6歳の幼児は、シール分配課題において相手にシールを分配する際に、相手との関係性に応じて分配の割合を変えることを報告している。また、Dunham, Baron, & Carey (2011) は、最小集団条件パラダイムによって集団に割り付けられた際に、5歳児が同じ集団 (内集団) を最良する傾向をみせることを明らかにしている。しかしながら、これらの研究では、すでに構築された関係性や、自分の意思が及ばないランダムな方法で集団に割り付けられるパラダイムによって作成された関係性を扱っており、子どもが自発的にどのような相手に関係性を構築したいという動機をもつのかは不明である。

そこで、本研究では、幼児が他者との関係性を構築したいと考える動機の発達について明らかにすることを目的とする。どのような相手と関係性を構築したいと考えるかについては、社会的動機仮説から外面的および内面的な心理的距離の影響が考えられる。幼児期におけるこれらの影響を検討する

ため、関係性認識の発達時期と考えられる年中児・年長児を対象に心理学実験を行う。具体的には仮説 A「幼児は自分と同じような好みを持つ（内面的に同質な）相手と関係性を構築，維持したいと考える」，仮説 B「幼児は自分を模倣する（外面的に同質な）相手と関係性を構築，維持したいと考える」，仮説 C「幼児は内面的に同質な相手を，外面的に同質な相手よりも近い存在と考える」という三つの仮説を検証することを目的とした。

方 法

参加児

静岡市内の認定こども園に通園する 22 名の幼児が参加した。参加児のリクルートはこども園を通して園の保護者に参加を呼びかけることで行った。参加児は実験参加の際に，保護者とともに実験場所に訪れ，保護者から代理で実験参加の同意を得た。本研究は静岡大学の「人を対象とする研究に関する倫理審査」の承認を得て実施された（登録番号 18-12）。

実験材料

課題で用いたパペットは，ダークブラウンのアルパカのパペット 4 体であった。それぞれのパペットには，「ゆう」，「ひかる」，「はる」，「とも」と書かれたネームプレートを首から下げさせ，それらをそれぞれのパペットの名前とした（図 1 参照）。パペットの名前は，日本人の男女を問わず用いられる名前として一般的なものの中から選出した。模倣課題には，木製の立方体（30mm×30mm×30mm）を 32 個用いた。課題の合間に参加児が使用するシールブックは，大創出版のおけいこシールブックシリーズ「ひらがな」と「かず」を用いた。シール分配課題にはパステルカラードットステッカーを用いた。PVT-R 絵画語彙発達検査（上野・名越・小貫，2008）は，A4 判の用紙の各ページに絵画を 4 枚ずつ印刷したものをを用いた。



図 1 実験に用いたパペット

手続き

参加児の通うこども園の一室で実験は行われた。参加児は保護者とともに実験場所を訪れ、保護者が実験についての説明を受けた。実験参加の同意を保護者から代理で得た後、保護者は別室で待機し、参加児のみが実験場所で実験に参加した。実験者は静岡大学教育学部で心理学を専攻する女子学生 2 名（実験者 A, B）であった。まず実験者 A が参加児とのラポール形成の際に、参加児の好きな食べ物、好きな遊び、好きなテレビ番組を聞き取った。その後、実験者 A は PVT-R を行って参加児の語彙能力を確認してから本課題を実施した。本課題では、実験者 B が操作するパペットが使用された。課題はパペットインタビュー課題、シールブックひらがな、パペット模倣課題、シールブックかず、シール分配課題の順に行われた。それぞれの課題については以下に記載する。

PVT-R 絵画語彙発達検査

参加児の言語能力の確認のために PVT-R を用いて参加児の語彙能力を調べた。手引きに従い、1 枚に四つの絵が描かれた紙を呈示し、参加児がその名称を知っているか（例えば、「ぼうしはどれ？」など）を尋ねた。

パペットインタビュー課題

実験者 B が 2 体のパペット（ゆう、ひかる）を操作し、実験者 A は参加児に主に質問することで課題を行った。まず、実験者 A から参加児に 2 体のパペットが遊びに来たことが伝えられ、実験者 B がそれぞれのパペットを操作して参加児にパペットの名前を言って自己紹介を行った。その後、実験者 A は参加児に対して、2 体のパペットにインタビューをすることを伝え、好きな食べ物、好きな遊び、好きなテレビ番組の順にインタビューを行った。実験者 B は 1 体のパペットはどの質問に対してもラポール形成時に得られた参加児のそれぞれの答えと同じものを答え、もう 1 体のパペットは全て異なるもの（実験者 A と同じものが好きであるという設定とした）を答えるようにパペットの操作を行った。どちらのパペットが同じ答えを言うかに関してはカウンタバランスをとった。実験者 A は両方のパペットの回答終了後に、片方のパペットは参加児と同じものが好きで、もう片方のパペットは実験者 A と同じものが好きであることを強調した（例：ゆうくんはカレーが好きなんだね。○○くんと同じだね。ひかるくんはハンバーグが好きなんだ。私もハンバーグ好きだよ）。三つのインタビュー終了後、実験者 A から次はシールを使った遊びを行うことが伝えられ、どちらか一方のパペットが参加児を手伝ってくれるので、どちらと一緒に次も遊びたいかが尋ねられた。その際に参加児が選んだパペットをパペットインタビュー課題における参加児の回答とした。シールブックひらがなを用い、基本的に参加児がシールブックにシールを貼るという作業を選ばれたパペットが応援したり助言したりするというを行い、約 3 分程度で終了した。

パペット模倣課題

パペット模倣課題では、実験者 B がパペットインタビュー課題とは異なる 2 体のパペット（はる、とも）を操作し、実験者 A は主に教示を行うことで課題を実施した。まず、実験者 A から参加児に

また別の 2 体のパペットが遊びに来たことが伝えられ、実験者 B がそれぞれのパペットを操作して参加児にパペットの名前を言って自己紹介をした。その後、実験者 A からブロックで遊ぶことが伝えられた。そして実験者 A は参加児、はる、とも、実験者 A にそれぞれ 8 個ずつのブロックを配分し、ブロックを使って自由に何かを作ることを提案した。参加児がブロックを使って何かを作成しているものを見つ、1 体のパペットは参加児と同じものをブロックで作成し、もう 1 体のパペットは参加児と異なるものをブロックで作成した。実験者 A は参加児と異なるものを作成したパペットと同じものを作成した。全員が作成し終わった後、実験者 A は参加児に何を作成したかを尋ねた。参加児の答えを待った後に、実験者 A はさらに 2 体のパペットに何を作ったかを尋ねた。この時も、1 体のパペットは参加児と同じものを作成したと回答し、もう 1 体のパペットは異なるものを作成したと回答した。実験者 A は両方のパペットの回答終了後に、片方のパペットは参加児と同じものを作成し、もう片方のパペットは実験者 A と同じものを作成したこと強調した（例：はるくんはタワーを作ったんだね。〇〇くんと同じだね。ともくんはトラックを作ったんだね。私もトラックを作ったんだよ）。その後、実験者 A から再度シールを使った遊びを行うことが伝えられ、どちらか一方のパペットが参加児を手伝ってくれるので、どちらと一緒に次も遊びたいかが尋ねられた。その際に参加児が選んだパペットをパペット模倣課題における参加児の回答とした。シールブックかずを用い、基本的に参加児がシールブックにシールを貼るという作業を選ばれたパペットが応援したり助言したりするというを行い、約 3 分程度で終了した。

シール分配課題

実験者 A から最後にシールを分配することが参加児に伝えられた。5 枚のシールが参加児に渡され、登場した全てのパペット 4 体に分配するように参加児に教示された。その時の参加児の分配数をシール分配課題の回答とした。

結果

パペットインタビュー課題

パペットインタビュー課題において、自分と同じものを好きと答えたパペットを選択した参加児は 22 名中 19 名 (86.36%) であり、自分と異なるものを好きと答えたパペットを選択した参加児は 3 名 (13.64%) であり、Fisher の正確検定の結果、自分と同じものを好きと答えたパペットを選んだ参加児の方が多かった ($p < .001$)。学齢差は図 2 の通りであった。

パペット模倣課題

パペット模倣課題において、自分と同じものを作成したパペットを選択した参加児は 22 名中 9 名 (40.91%) であり、自分と異なるものを作成したパペットを選択した参加児は 13 名 (59.09%) であり、Fisher の正確検定の結果、有意な差はみられなかった ($p = .52$)。学齢差は図 2 の通りであった。

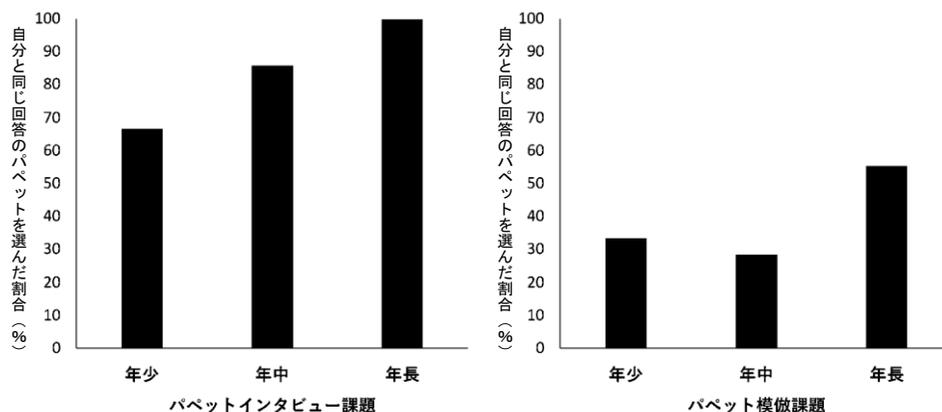


図 2 それぞれの課題における学齢差

シール分配課題

シール分配課題においては、参加児は基本的に最初に平等に 1 枚ずつパペットにシールを分配した後、残りの 1 枚をどのパペットに分配するかを検討した。残りの 1 枚を、パペットインタビュー課題で同じものを好きと答えたパペットに対して分配した参加児は 22 名中 9 名 (40.91%) であり、パペット模倣課題で自分と同じものを作成したパペットに対して分配した参加児は 22 名中 6 名 (27.27%) であり、それ以外のパペットに分配した参加児は 22 名中 7 名 (31.82%) であった。カイ二乗検定を行ったところ、分配に有意な差はみられなかった ($\chi^2(2) = 3.73, p = .16$)。

考 察

実験の結果、パペットインタビュー課題でのみ、参加児の選択には有意な差がみられたが、パペット模倣課題やシール分配課題では有意な差がみられなかった。この結果は、仮説 A「幼児は自分と同じような好みを持つ (内面的に同質な) 相手と関係性を構築、維持したいと考える」を支持するが、仮説 B「幼児は自分を模倣する (外面的に同質な) 相手と関係性を構築、維持したいと考える」、仮説 C「幼児は内面的に同質な相手を、外面的に同質な相手よりも近い存在と考える」は支持しない結果であった。まず、パペットインタビュー課題についてであるが、パペットインタビュー課題では、実験者 A は、パペットが参加児と同じものが好きだということを強調したが、パペットが同じものを好きだと答えたすぐ後に「同じだ!」と喜ぶ参加児がみられた。一方のパペットが様々な面で自分と同じ好みをもつという点は、その後の幼児の選択に強い影響があったと考えられる。一方で、パペット模倣課題においても、実験者 A はパペットが参加児と同じものを作成したことを強調したが、参加児は大きな反応をみせることはなかった。鈴木 (2012) は、幼児は模倣されることによって、他者と関わることの端緒が得られることや、自己の行為のイメージに気づくことなどの機能がもたらされると指摘しているが、本研究の結果から、模倣されることは他者との関係性の維持には影響を与えないことが示唆された。

本研究の限界についてであるが、シール分配課題ではそれまでの課題で登場した4体のパペットが登場したものの、幼児のそれぞれのパペットに対する記憶が保持されていなかった可能性がある。シール分配課題ではほぼ全ての参加児は、4体のパペットに平等に1枚ずつシールを分配した後、残りの1枚をどうするかについて悩んでいた。実験者が分配を促すことでようやく分配を行っていたが、ランダムに最後の一枚を分配していた可能性が考えられる。しかしながら、仮説C「幼児は内面的に同質な相手を、外面的に同質な相手よりも近い存在と考える」は、パペットインタビュー課題では有意な差がみられた一方で、パペット模倣課題では有意な差がみられなかったことから一部支持されたといえよう。また、収集できたデータ数の関係で年齢差について詳細な検討を行うことができなかった。今後多くのデータを収集することによってさらなる検討が必要である。

本研究では、幼児が自分と同じ好みを持つ他者と関係性を構築・維持したいと考えることが示唆された。この結果は、好みが同じであるということ子どもに明示的に伝えることによって、子どもが相手と関係性を構築したいと感じる動機を高めることができる可能性を示唆している。Furumi & Hamilton (in prep) では、人は自分と同じ集団に属する相手の心を理解しようとする動機がより高いことが示唆されている。幼児においても同様であると仮定するならば、幼児期において相手の好きなものなどを明示的に伝えることによって、相手と関係性を構築したいという動機が高まり、より自己の社会的な能力を発揮できるようになるかもしれない。今後、様々な関連研究を行ってより詳細な検討が必要であろう。

引用文献

- Chevallier, C., Kohls, G., Troiani, V., Brodtkin, E. S., Schultz, R. T. (2012). The social motivation theory of autism. *Trends in Cognitive Sciences*, 16, 231-239.
- Dunham, Y., Baron, A. S., & Carey, S. (2011). Consequences of “minimal” group affiliations in children. *Child Development*, 82, 793-811.
- 古見文一・Antonia Hamilton (2017). ヴァーチャルリアリティ空間でロボットの心を読みたくくなる? 信学技報, 117, 183-188
- Furumi, F., & Koyasu, M. (2013). Role-play experience facilitates reading the mind of individuals with different perception. *PLoS ONE* 8(9), e74899. doi: 10.1371/journal.pone.0074899.
- Furumi, F., & Koyasu, M. (2014). Role-play facilitates children’s mindreading of those with atypical color perception. *Frontiers in Psychology* 5:817. doi: 10.3389/fpsyg.2014.00817.
- 廣瀬聡弥・志澤康弘・日野林俊彦・南徹弘 (2006). 幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係. *心理学研究*, 77, 40-47.
- 近藤龍彰 (2017). 幼児期における友達関係の発達の变化: やり取りの頻度と相手に着目して. *心理科学*, 38, 25-37.
- Moore, C. (2009). Fairness in children’s resource allocation depends on the recipient. *Psychological Science*, 20, 944-948.

- 謝文慧 (1999). 新入幼稚園児の友だち関係の形成. 発達心理学研究, 10, 199-208.
- 鈴木裕子 (2012). 模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能と役割. 保育学研究, 50, 141-153.
- 高辻千恵 (2002). 幼児の園生活におけるレジリエンス: 尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討. 教育心理学研究, 50, 427-435.
- Wellman, M. H., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: the truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.

謝 辞

本研究に協力してくださったこども園の園児と保護者の皆様, 先生方に深く感謝申し上げます。また, 実験の協力をしてくださった静岡大学教育学部の小澤美月さんと清水菜生さんに感謝申し上げます。

また, 本研究を遂行するにあたり, 助成を賜りました公益財団法人発達科学研究教育センターに心より感謝いたします。